

# 紀伊水道域におけるマダイ単価の推移\*

堀木 信男

はしがき

とめたものである。

紀伊水道域におけるマダイは、小型底びき網、一本釣、刺網、定置網などで漁獲され、経済的価値が非常に高い魚種である。この紀伊水道域で漁獲されるマダイは瀬戸内海東部系群に属しており、近年、その資源水準は比較的高水準を維持しているため、それに相応して漁獲量も高い水準で推移している<sup>1)</sup>。

特に、友ヶ島周辺海域を漁場とする加太地区の一本釣により漁獲されるマダイは、京阪神の消費地に近く、かつ、「明石ダイ」、「鳴門ダイ」と並ぶ「加太のマダイ（かつては加太見ダイとも呼称されていた。）」として主に活魚によりトップブランドで取り扱われているため、極めて高い単価で入札されている。このようなマダイは加太地区にとって最重要魚種となっており、その単価の推移はたいへん注目されるところである。

ところが、近年、水産物は養殖漁業による収穫量の増加あるいは外国産の輸入量の増加、そして更に、不景気による需要量の減少などにより、魚価の低迷が極めて顕著である。特に、その傾向が著しいのは、本県ではマダイ、イセエビなどの高価格水産物である。

そこで、本報告は魚価の低迷が極めて顕著である紀伊水道域におけるマダイの単価の推移について取りま

## 方法

この報告で取り扱うマダイの漁獲量ならびに漁獲金額、単価などについては「和歌山県農林水産統計年報」（近畿農政局和歌山統計情報事務所）、「和歌山県漁業地区別統計表」（和歌山県）および加太、雑賀崎漁業協同組合資料を用いた。また、全国のマダイ漁獲量、養殖収穫量、タイ類輸入量および消費者物価指数などについては「漁業・養殖業生産統計年報」（農林水産省統計情報部）と「水産物流通統計年報」（農林水産省統計情報部）を用いた。

## 結果および考察

### 1 紀伊水道域におけるマダイ単価の推移

漁業種類別のマダイ単価の推移を図1に示した。

加太地区で一本釣と刺網によって漁獲されるマダイの単価（円/kg）は1988年から1990年をピークにして、その後の単価の低下が極めて顕著である。また、雑賀崎地区で小型底びき網によって漁獲されるマダイの単価も加太地区の一本釣、刺網の単価と同じように

1992年以降低下が極めて顕著である。外間・長谷川<sup>2)</sup>は、瀬戸内海産マダイの価格は集中的な消費地である大阪を頂点として、それからの距離が遠くなるにしたがって、しだいに低下する傾向がみられると報告している。更に、河野ら<sup>3)</sup>によると、和歌山県のマダイは、大阪・名古屋・東京のいずれでも、その消費地市場における平均魚価よりも高値になっており、また、大都市近接市場になるほど高価格を達成していることが予想されるとしている。因みに加太、雑賀崎の両地

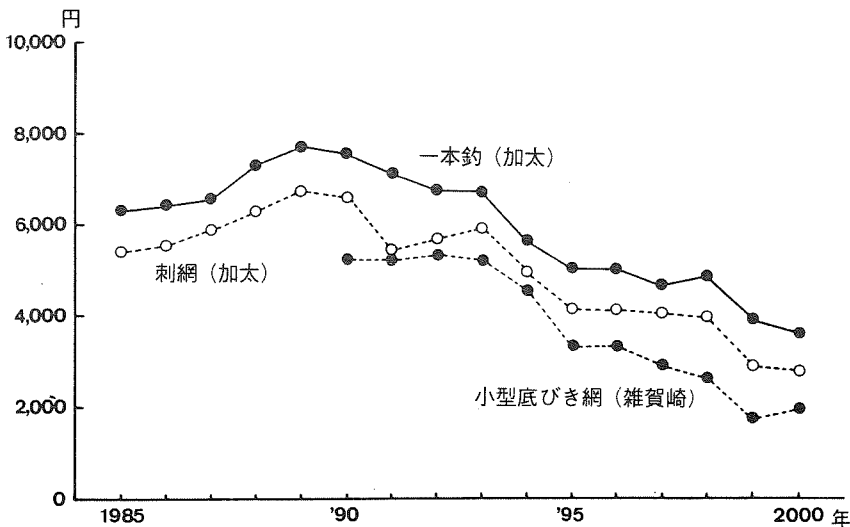


図1 漁業種類別のマダイ単価の推移

\*水産業振興費による。

区に水揚げされるマダイは、そのほとんどが大阪へ出荷されている。

一本釣によって漁獲されるマダイの単価は、1988年から1991年の間は7,000円台であったのが、1995年には5,000円台となっている。そして、最近年の単価は1985年以降では最低の3,000円台となり、最高価格時の約1/2以下となっている。また、刺網によって漁獲されるマダイの単価は、1988年から1990年の間は6,000円台であったのが、1998年には4,000円を割っている。そして、最近年の単価は2,000円台となり、一本釣によって漁獲されるマダイの単価と同じように最高価格時の1/2以下となっている。

次に、小型底びき網によって漁獲されるマダイの単価は、1990年から1993年の間は5,000円台で比較的高かったのが、その後急激に低下して1999年には、1990年以降では最低の1,700円となり、最高価格時の1/3以下となっている。

因みに近年における加太、雑賀崎の両地区で水揚げされるマダイの漁獲物年齢組成の変化はほとんどみられない<sup>1)</sup>。

小川・外間<sup>4)</sup>によると、兵庫県沼島漁協における漁法別のマダイ年平均単価は1981～1993年の13年間を通じて一本釣(2,400～3,300円)が常に最も高く、建網(1,800～2,500円)、小型底びき網(1,200～2,300円)の順に低かったと報告している。加太、雑賀崎の両地区に水揚げされる漁法別のマダイ年平均単価は、沼島漁協におけるそれらの年平均単価よりも非常に高いものとなっているが、漁法別の年平均単価の順序は全く同じである。

更に、小川・外間<sup>4)</sup>によると、いずれの漁法で漁獲されてもマダイ年平均単価は1984年または1985年に最低となり、その後は概ね回復傾向を示しているとしている。ところが、加太地区で水揚げされるマダイ年平均単価は1988年から1990年をピークとして、その後低下傾向にある。

## 2 マダイ単価の季節変化

次に、図2、図3、図4に加太地区における一本釣と刺網、雑賀崎地区における小型底びき網によって漁獲されたマダイ単価の月変化、また、図5に加太地区の一本釣によるマダイ漁獲量の月変化を示した。なお、マダイ単価の月変化を検討するため、代表年を選んで図示した。

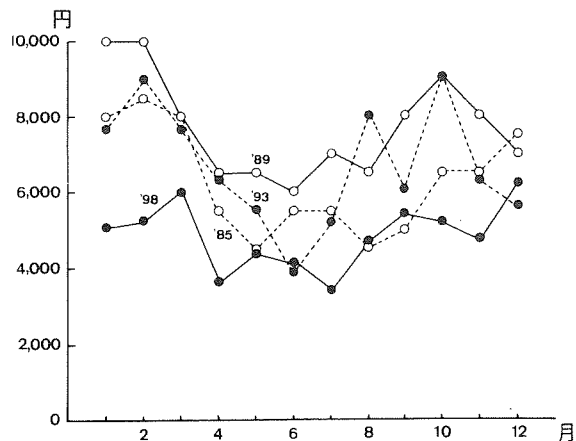


図2 一本釣で漁獲されたマダイ単価の月変化 (加太地区)

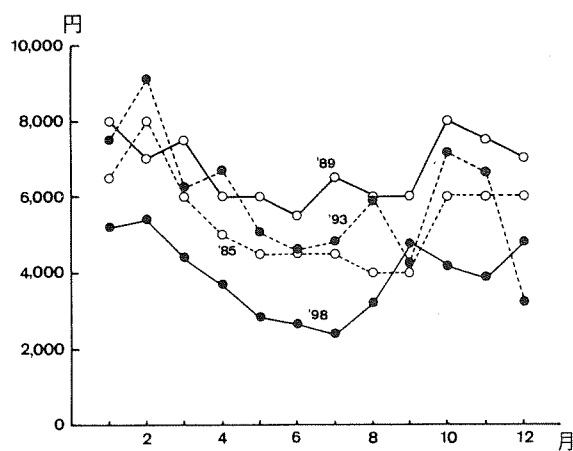


図3 刺網で漁獲されたマダイ単価の月変化 (加太地区)

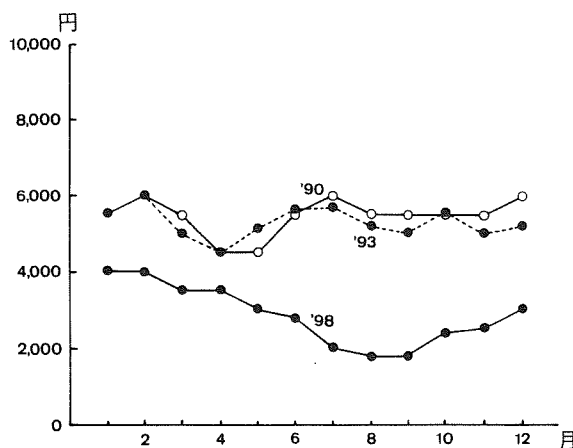


図4 小型底びき網で漁獲されたマダイ単価の月変化 (雑賀崎地区)

加太地区では、刺網によって漁獲されるマダイの単価よりも一本釣によって漁獲されるマダイの単価の方が常に高いが、両者の月変化は比較的類似している。すなわち、10月から翌年3月までの間の秋・冬季は比較

的単価が高く、4月から9月までの間の春・夏季は低い傾向にある。小川・外間<sup>4)</sup>によると、兵庫県沼島漁協のマダイ単価についても、通常春季に最も低下する傾向がみられると述べている。また、河野ら<sup>2)</sup>は、加太地区におけるマダイの月別価格変動幅が比較的せまいことは漁家経済の安定化には一層有効に作用していると述べている。

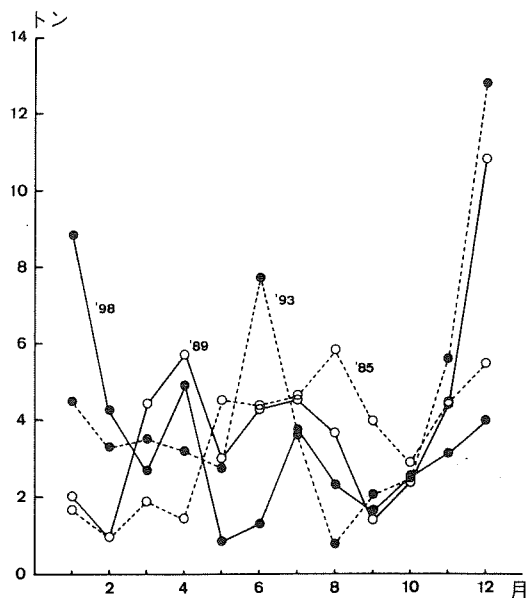


図5 加太地区の一本釣によるマダイ漁獲量の月変化

また、雑賀崎地区で小型底びき網によって漁獲されるマダイの単価は、12月から翌年4月までの間は比較的高く、5月から11月までの間は低い傾向にある。

加太地区では、単価の高い年は季節変動が大きく、単価の低い年はそれが比較的小さい。ところが、雑賀崎地区では、加太地区とは全く異なり、単価の低い年は高い年に比べて季節変動が大きくなっている。

次に、マダイの単価と漁獲量の月変化をみると、漁獲量の少ない1-3月は単価が高く、逆に漁獲量の多い1993年6月や1985年8月は単価が低くなっている。このように全体的には、漁獲量の増加が魚価の低下をもたらしている。ただし、1989年と1993年の12月は漁獲量が極めて多いにもかかわらず単価はあまり低下していない。これは、福田・松村<sup>5)</sup>がマアナゴの漁獲量と単価の関係で述べているように、正月をひかえて需要が多くなるため、漁獲量の増加が魚価の低下をもたらさなかったのであろう。

### 3 マダイの単価とマダイ漁獲量、養殖収穫量ならびに輸入量との関係

一般に商品の品質が一定であれば、供給量の増加は価格の下落をもたらす<sup>6)</sup>と言われている。そのため、マダイの価格に大きな影響を及ぼす要因として、我が国におけるマダイの漁獲量、養殖収穫量および輸入量の多寡が挙げられる。そこで、全国のマダイ漁獲量・養殖収穫量ならびにタイ類輸入量の推移を図6、加太地区の一本釣、刺網、雑賀崎地区の小型底びき網によるマダイ漁獲量の推移を図7に示した。

全国のマダイ漁獲量は1988年の13,000トン以降微増しており、タイ類の輸入量は1987年の25,800トンから

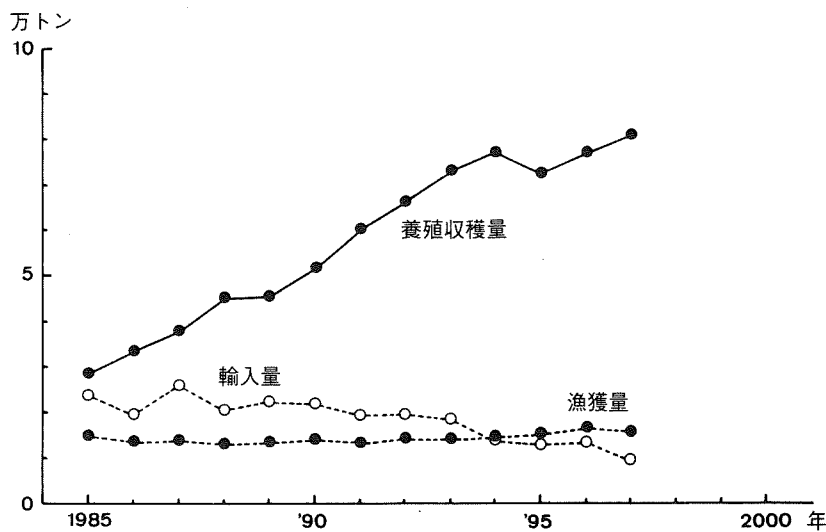


図6 全国のマダイ漁獲量・養殖収穫量ならびにタイ類輸入量の推移

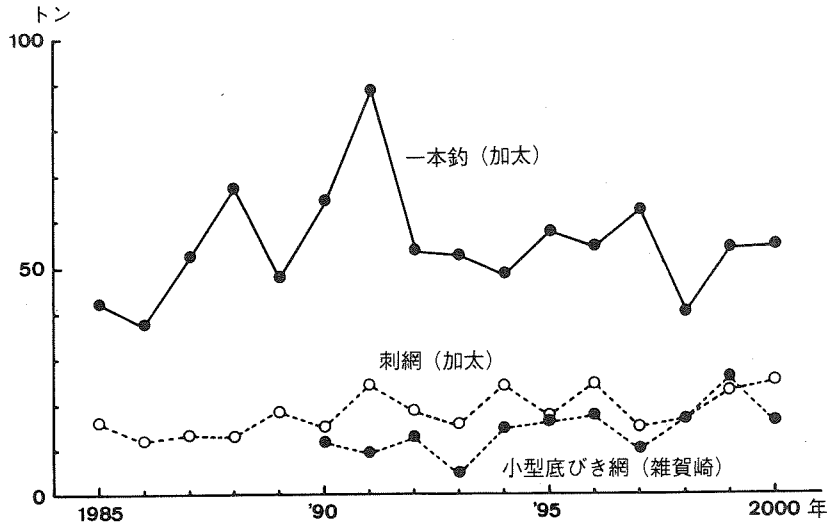


図7 加太地区の一本釣、刺網、雑賀崎地区の小型底びき網によるマダイ漁獲量の推移

減少傾向が著しく、1997年には10,000トンを超えている。このようにマダイ漁獲量とタイ類輸入量については、あまり大きな変動はみられないが、養殖による収穫量は1985年の28,000トン以降増加傾向が極めて顕著で、1997年には1985年の3倍近くの80,900トンに増加している。

マダイの単価と全国のマダイ漁獲量、養殖収穫量ならびに輸入量との関係を見ると、マダイの単価は、この

三者の中では養殖収穫量との関係が最も密接なものと考えられる。養殖収穫量はマダイの単価がピークであった1988年～1990年以降も増え続けており、この養殖収穫量の増加がマダイの単価を下げている大きな要因と考えられる。

次に、マダイ平均単価および消費者物価指数の推移を図8に示した（ただし、1985年を100として、その後の推移を指数で示した。）。

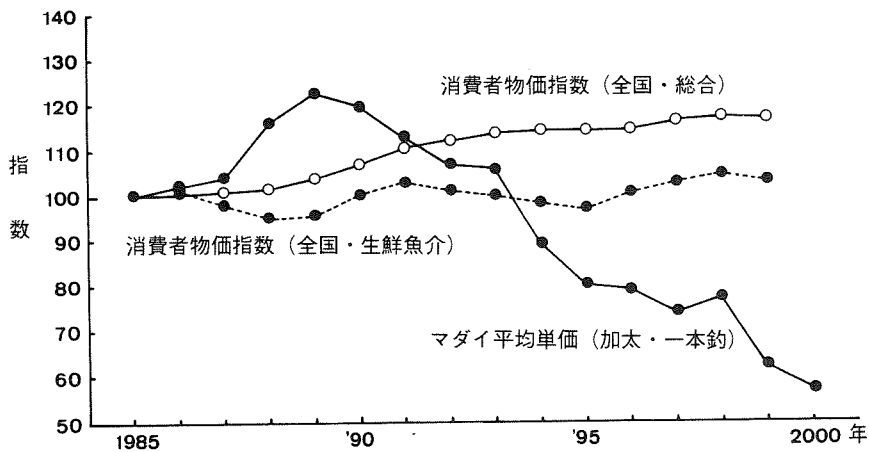


図8 マダイ平均単価および消費者物価指数の推移 (1985年を100とする)

消費者物価指数は1985年以降微増しているが、マダイの平均単価（加太地区、一本釣）は1988年から1990年にかけて消費者物価指数を大きく上回っていたが、それ以降は急激に低下して、2000年にはその指数は60を割った。

加太地区におけるマダイの単価は1988年から1990年をピークとして、それ以降の単価の低下が極めて顕著である。これは近年、マダイ養殖漁業による収穫量の増加、あるいは不景気のため（因みに我が国では1991年にバブルの崩壊がみられた。）、消費者の高価格魚離れなどによるマダイ需要量減少の影響を受けて、魚価が低迷しているものと推察される。なお、このような傾向はマダイ、イセエビなどの高価格水産物ほど著しいと考えられる。

### 要 約

- 1 漁法別のマダイ単価は一本釣が常に最も高く、刺網、小型底びき網の順に低い。
- 2 加太地区で一本釣と刺網によって漁獲されるマダイの単価は1988年から1990年をピークにして、その後の単価の低下が極めて顕著である。また、雑賀崎地区で小型底びき網によって漁獲されるマダイの単価についても1990年以降の低下が顕著である。
- 3 加太地区で一本釣と刺網によって漁獲されるマダイの単価の月変化は比較的類似しており、秋・冬季は比較的単価が高く、春・夏季は低い傾向がみられる。また、雑賀崎地区の小型底びき網でもほぼ同様な傾向がみられる。
- 4 マダイ養殖漁業による収穫量の増加がマダイの単価を下げている大きな要因と考えられる。
- 5 また、不景気によるマダイ需要量の減少が魚価の低迷を招いている要因の一つでもあり、この傾向は高価格水産物ほど顕著である。
- 6 マダイの単価は、我が国におけるバブル崩壊の2-3年前から低下を続けている。

### 文 献

- 1) 堀木信男、2001：マダイ、平成12年度複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書、4-17。
- 2) 外間源治・長谷川 彰、1967：魚価形成の地域差に関する調査研究、内海区水産研究所年次報告、昭和

41年度、16-17。

- 3) 河野通博・柿本典昭・浜田英嗣・相沢 昂・谷口恒一・清水静志・福沢清司・田中史朗・田和政孝、1985：関西国際空港開設に伴う、和歌山県における、水産物流通への影響とその課題に関する調査研究、和歌山県・和歌山県下水産物流通状況調査団、pp.187。
- 4) 小川泰樹・外間源治、1998：兵庫県沼島漁協の漁法別銘柄別マダイ単価の推移、漁業資源研究会議、底魚部会報、No. 1、25-38。
- 5) 福田富男・松村眞作、1996：牛窓町漁業協同組合におけるマアナゴ漁獲量と単価の関係について、岡山水試報、11、14-18。
- 6) 多田 稔、2001：15. サバ類の価格形成の諸要因、水産海洋シンポジウム マサバとゴマサバ太平洋系群の漁業、資源、管理の現状と将来展望、水産海洋研究、65(4)、211-212。